

大同大学大同高校

「曲がれ！スプーン」

2018. 12. 23 上演4

緞帳が開くとそこには舞台の端から端まで広がる大きく古風な喫茶店。セットというより、私達がまるでお店の中にいるかのような包み込む舞台だった。店内にはカウンター席、テーブル席、さらには大きなクリスマスツリー、カウンターの内側には食器棚もあり、その再現度とセットのサイズ感の迫りに会場全体がまず息をのんだ。

この物語はタイトルで察しが付くように、超能力、エスパーの話である。話は「カフェ・ド・念力」のマスターの、超能力をもつ男達を引き合わせたいという思いから始まっていく。電子機器を操るエレキネシスの使い手「井出」、人の考えを読み取るテレパシーの「椎名」、物を透視する「寛」、物体を動かすサイコネシスの「河岡」、時間を止め、空間を移動するテレポートの「小山」、細いところを通り抜ける事が出来る、細男の「神田」の6人が順に技を披露していく。そこに細男の取材に来たADが入店し、自分達の能力を広められたくないと思ったエスパー達はその力を隠そうとする、コメディ要素の高い作品であった。

この劇は、エスパーが技を繰り出す際に、技ごとに違った色の照明を当てることで視覚的に分かりやすく表現されていた。しかし、その他にはあまり光による特別な演出はされていなかった。その分、役者の力量が問われる作品であった。

脚本の力もあるが、役者の絶妙な間の取り方、掛け合いのタイミングのテンポの良さ。パワフルでエネルギッシュな演技により、親しみやすい作品を作り上げており、会場全体が笑いの渦に巻き込まれていた。たくさんの稽古を積んでいても演技がマンネリ化してないところに驚かされた。その要因としては、演じることの楽しさを忘れない役者達によって会場の空気がつくりあげてられていることが大きいと感じられた。劇中に誰かの技に他の人達が感嘆し拍手する場面では、見ている私達も思わず拍手したくなるほど、観客と役者達の距離が近く感じられた。

この作品のおもしろさは、役者の客を引き込む演技力だけではなく、劇中にあった出来事の伏線を少しずつ回収していくところにもあった。すべての出来事には意味があり、それが繋がったときにはスッキリとした気持ちよさがあり面白かった。多くの高校演劇作品には観客に伝えたいことが隠されていがちだが、この作品はそんなメッセージ性よりもお客さんを楽しませたいという上演側の素直な気持ちが表れていた。時間があっという間に感じるほどすばらしいコメディ作品であった。

大同大学大同高校の皆さん、お疲れ様でした。